

氏 名	青 砥 吉 隆
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	乙 第 3 2 号
学位授与年月日	2 0 1 9 年 3 月 2 2 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	信念とヴィジョンの証 ——なぜアメリカは月を目指したのか—— An Act of Faith and Vision: Why Did the United States Go to the Moon?
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 森 本 あ ん り 副 査 名 誉 教 授 M. ウィリアム スティール 副 査 特 任 教 授 大 西 直 樹 副 査 特 任 教 授 千 葉 眞

---

## 論文内容の要旨

本論文は、「アメリカはなぜ月を目指したのか」という問いを立て、これに「アメリカ国民の歴史的自己理解を現実化するためだった」という答えを与えようとするものである。アポロ計画は、これまでアメリカとソヴィエト連邦の冷戦対立という枠組みのなかで、ミサイル開発競争という軍事的な視点から論じられることが多かった。しかし、大陸間弾道ミサイルは地球表面を離脱することがなく、38万キロメートルという桁違いに長い宇宙空間を経て月へ到達し着陸して帰還するという計画は、質的にまったく異なる目的を有している。軌道計算などの作業がいまだ多くの人手によって担われていた当時、巨額の国家予算を投じて行われた月面着陸計画は、実利的な目的達成のための手段であるよりは、その達成自体が目的であるような特異な理念的性質を帯びていた。著者はこれを「アメリカの自己理解の具体的現実化」として捉え、大統領や宇宙飛行士たちの発言からその実像を描き出すことに成功している。

第一章では、ソヴィエトによるスプートニクの打ち上げがアメリカに与えた衝撃から、科学・技術における世界首位を奪還することが国家的使命と受け止められ、その使命が宇宙分野において表現されるべきと考えられたことが論じられる。1,600億ドルもの資金

を費やししながら、月面に降り立った宇宙飛行士アームストロングが「アメリカにとって」ではなく「人類にとって」の飛躍であると述べたことも、この使命感から理解される。

第二章では、ケネディ大統領による二つの演説が分析される。進歩を運命と捉えるアメリカの歴史的な自己理解に照らしてみると、宇宙開発においてソヴィエト連邦に遅れをとることは、国家的な信念と存在意義が否定されるにも等しい。著者によれば、科学・技術における覇権を回復することは、アメリカの大義である自由を指導者として擁護するためにも必須であった。月面着陸がミサイル開発などの軍事的な利用目的を超える国家的なプロジェクトと位置づけられたのは、こうした理念的な自己理解のゆえであった。

第三章は、『タイム』や『ライフ』の創刊者ヘンリー・ルースによる「アメリカの世紀」論を取り上げ、アメリカ国家が全人類の指導者であるべきだという理念の由来を辿っている。19世紀以来の経済発展に裏付けられ、アメリカの工業製品や文化は世界に浸透したが、ルースにとりこれは国際政治においても世界の民主主義と自由を擁護するためにアメリカが指導的役割を果たすべきことを意味していた。「アメリカが進むように世界も進む」のであるから、アメリカの文化を享受している民主主義国家が脅かされているのであれば、アメリカは当然それを守る義務と責任を負う、という理解であった。

第四章では、その『ライフ』誌がアポロ計画を担った宇宙飛行士たちをどのように描いたかが時系列的に検討されている。彼らは、ケネディが示したアメリカ的な信念を体現する英雄として扱われ、その生活の中で新たな発明品を披露することで、科学・技術の進歩により明るい未来が到来すべきことを読者に強く印象づけた。彼らの資質は、家族愛、勇敢さと愛国心、キリスト教、アメリカの未来の体現者、という四点に表現される。彼らは家族を愛するよき夫として、また彼らの妻は夫を献身的に支える魅力的な良妻賢母として描かれたが、これは私生活において彼らが抱えていた非理想的な現実を覆い隠しての神話づくりであった。また、宇宙飛行士の多くは軍に所属する優秀なパイロットで、発展途上にある宇宙開発計画が危険を伴うことを知りつつも、祖国への愛と勇敢さによってその任務に奉仕することを誇りに思っていたことが強調されている。国民に核戦争の危機が実感されていた当時、このような態度は理想的な模範となった。彼らはまた、強い倫理観を備えた信仰深いキリスト教徒でなければならなかった。これは、宇宙開発競争においてアメリカが「不信仰」で「不道德」な共産主義と対照的であることを示すためである。最後に、彼らはアメリカの科学・技術によって人類が発展し続けるだろうという未来観を持っており、運命論的な進歩史観をみずから体現する者たちとして描かれた。

第五章は、スタンリー・キューブリックの映画『2001年宇宙の旅』に描かれた科学・技術への楽観的な信頼を論じている。実際のところ、冷戦時代の科学は、核兵器など人類滅亡へと通ずる危険性を孕むものであったし、1962年にはレイチェル・カーソンの『沈

『黙の春』が科学・技術による環境破壊の危険性を訴えていた。キューブリック自身も、1964年には核兵器による人類滅亡という衝撃的な結末を迎える『博士の異常な愛情』を発表している。にもかかわらず、『2001年宇宙の旅』には、科学・技術の発展はヒトの進化をもたらし、正しく使われるならば人類をより高度な段階へと至らしめ得るものである、という信念が表現されている。この映画では、進化の節目ごとに人間よりはるかに高度な知能を持ったモノリス・クリエイターたちの存在が暗示されるが、これは第一章で見たアメリカの運命論的進歩史観の延長線上にある。自らの将来を「冷凍睡眠」技術に託する人びとがこの頃から出てきたことも、科学・技術の直線的な進歩に対するごく楽観的な信頼が一般大衆に広まってきたことを示している。

第六章では、月面に今も残されている合衆国旗と銘板の意味が論じられる。著者によれば、“We came in peace for all mankind”という文言は、「全人類のために」ではなく「全人類を代表して」と訳されるべきである。ニクソン大統領が執務室からかけた電話で、「アメリカ国民のみならず、全ての国の人々を代表して」(representing not only the United States but men of all nations)と語っていることもこれを裏付ける。この銘板は、地球人以外の知的生命体に向けられたもので、1972年に打ち上げられたパイオニア10号も、同じ目的をもった金属製のメッセージ・ボードを載せている。これらは、「全人類を代表して地球外の知的生命体に向けて発言する」というアメリカの自己理解を明確に示すものである。これら一連の解釈を通して、アポロ計画はアメリカの国家的なアイデンティティを具体的に表現するという目的の実現のために遂行された、という論旨が成立する。

## 論文審査結果の要旨

口頭試問においては、まず著者が掲げた論文主旨を明確にすることが求められた。「なぜアメリカは月を目指したのか」という問いを立て、それに対する答えがケネディ大統領の「信念とヴィジョンの証」であるとすれば、各章はこの主旨を論証する過程の一部として有機的に位置づけられねばならない。各章にちりばめられた思想史的な発見の数々も、統合的な論旨の中でこそ本来の意義をもつことになる。審査委員たちの共通した評価は、個別的な着想に優れているものの、それらを博士論文として一体的に編成する統合力にやや弱点が見られる、というものであった。

個別論点で注目に値する指摘は少なくない。上記要旨に記された諸解釈は、アメリカ研究の視点からしてそれぞれ有意義と言うことができる。ことにその出発点となった主張、すなわち月面着陸というプロジェクトが大陸間弾道ミサイルの開発という軍事的な目的とは質的に異なった理念的な目的をもつ、という主張は重要である。当時の国民的雑誌を丹念に読み解き、アポロ計画とその可視的な担い手である宇宙飛行士たちがいかにアメリカ的な生活様式を誇示するものとして描かれていたかを解明した章は、具体的で説得力がある。冷戦の切迫した軍事的危機が感ぜられる中、大衆は科学・技術の進歩に対するナイーブな信頼を寄せるようになり、宇宙飛行士とその家族が演出する理想的なアメリカ像が国内外に広められたこと、しかしその実態は必ずしも理想的とは言えない問題や苦悩を含んでいたこと、なども他に例をみない興味深い指摘である。キューブリックの『2001年宇宙の旅』は、1968年公開当時のアメリカ国民が抱き始めていた宇宙への関心を飛躍的に高めたが、それは翌69年7月のアポロ11号月面着陸という全世界的なニュース報道とほとんど一体化して受け止められた。したがって、この映画から大衆の国民的な自己理解を探ることは適切である。最終章の「全人類を代表して」という訳の提案は、世界人類へ向けられた視点を百八十度転換させ、世界人類を背にして地球外知的生命へ語りかけるという大胆な再解釈を示している。

他方、学位請求論文の完成度からすると、いま一段の洗練が求められる部分も見られた。論文は特に戦後アメリカのアポロ計画に焦点をあてているが、これをアメリカ研究の文脈において検証するためには、19世紀のManifest Destiny論に留まらず、さらに広い歴史的背景を視野に入れて論ずる必要がある。口頭試問においては、月面への第一歩がプリマス・ロックに第一歩をしるしたピルグリム神話の類型論を暗黙のうちに前提している、という指摘もなされた。Perry Miller の“Errand into the Wilderness” 概念も、宇宙時代へと拡大適用されるべきである。アメリカの自己理解を問う研究であれば、少し遡

るだけでも Bernard Bailyn, Louis Hartz, Gordon Wood といった基礎的な先行研究の枠組みがある。これらの文献による蓄積との折衝に自説を定位する作業も不可欠であろう。雑誌や映画といった大衆メディアの解釈は、とくに映像が強調されるため、具体的で説得力がある反面、解釈の幅が広く、これを資料として用いるにはメディア研究やカルチュラル・スタディーズの手法に習熟していることが望まれる。

研究視角の多義性は、論文主旨の主語にも曖昧さをもたらす。「信念とヴィジョン」という言葉は、ケネディ大統領の演説に見られるもので、それをアポロ計画によって具現化したのは大統領と政府である。国民がそれをどのように受け止め、どの程度共有したかは、同じ主題でも別の取り組みを要求する問いとなる。口頭試問では、著者がこの区別にやや無頓着であるとの印象があった。また、アメリカの特殊性を論じるには、アメリカ以外の諸国との比較が有効であろう。宇宙開発のヴィジョンとその実現化について、ソヴィエト連邦やヨーロッパ諸国、それに日本国内の反応を同時代的に検証することで、論旨のさらなる補強が可能となったはずである。参照された文献は、雑誌やニュース記事などが広汎にわたって渉獵されているが、各章の伝記や映画論評などでは、いくつかの特定文献への依存度が高いことも指摘された。

以上の批判的な指摘にもかかわらず、本論文は著者の長年の取り組みの集大成として見るべき結果を表しており、各所に盛り込まれた興味深い解釈は、アメリカ研究の分野に貢献するところが大きい。審査委員一同は、これらを総合的に勘案し、本論文が本学の博士学位請求論文としての水準を満たしていると判断した。なお、漢字の誤変換が少なからず見られるので、製本として提出される際には全体的に細心の見直しを行って修正することを条件とする。